

## 日本の製造業のプライドを発信する ～全日本製造業コマ大戦にかける思い～

株式会社ミナロ（全日本製造業コマ大戦協会 会長） 緑川 賢司

私たちには夢がある。

それは未来を創ること。

製造業はモノを作るだけでは無い、子供や学生たちが希望を持てる未来だって創りだせることを証明したいのだ。

### 1. 全日本製造業コマ大戦とは

全国の中小製造業が自社の誇りを賭けて作成したコマを持ち寄り、一対一で戦う大会である。

コマ大戦にて使用されるケンカゴマは直径20mm以下、一円玉より小さいコマだ。

その小さなコマを製造業が本気で設計し、プロの機械を使用して自社の持てる技術を全て注ぎ込み作成する。

ルールは単純、直径20mm以下であればあとは材質・重さ・形など一切問わない。

勝敗は、相手のコマよりも長く回り続けた方が勝ち、土俵の外に出たら負け、2連勝した時点で試合終了、敗者は勝者にコマを差し出さなければならない（それまでの戦利品を含み総取り）。

このわかりやすく、容赦ないルールが、コマ大戦が受けている理由でもある。

### 2. コマ大戦のきっかけ

2011年の秋頃に、製造業仲間の懇親会で手にしたコマを回してみた。

神奈川県茅ヶ崎市にある株式会社由紀精密が技術アピールのために作ったSEIMITSU COMAである。

確かに良く回る。簡単に回しても3分くらいは回っている。ぱっと見た目だけではわからないが、これだけ回するには相当の精度が必要だ、その精度を当たり前に出してくるのが日本の技術だよなあ、と感心すると同時に、この大きさのコマなら全国どこの町工場でも大した負担無く作れるのではないか？材料は工場に落ちている端材で良いし、旋盤を持っていればわずかな時間で出来てしまう。それを集めて日本チャンピオンを決めたらどうだろう？

そう思いつきfacebookでその企画を話してみたところ、早々に十数社が反応しこれなら行ける！と翌年2月に開催されるテクニカルショウヨコハマをコマ大戦の舞台にした。

### 3. コマ大戦への思い

製造業町工場は一般的に、仕事の依頼が来な

い限りモノは作れない。事前に書かれた図面通りのモノしか買い取ってもらえない。

しかし、モノづくりが好きな連中は、チャンスがあれば自分の思いのままのモノを作ってみたいと思っている人が少なくない。現場での毎日の仕事はどうしても作業になりがちで、もちろんそれは飯を食べるためには必要なのだが、それだけではモチベーションが保てなくなる。

言われたままに作って納めて、出来が良くても当たり前。短納期で残業が続いて納めても、良品を出すために地道に努力をしても、ありがたい言葉もなく失敗したときだけ文句を言われる。

それでも給料が良ければ救われるだろうが、この時代にそれは期待できない。デフレで毎年コストダウンで、ベースアップどころか、カットを考えなければやっていけない。こんな状態がいつまでも続けば、だれも製造業の現場仕事なんてやらなくなってしまっただろう。

しかし、日本は技術立国で、資源は無いが、材料に付加価値をあたえる技術が得意で、それで戦後の復興を何処の国よりうまくやってきた国だ。そんな先人達の残した技術を継承しないで捨ててしまったら、取り返しのつかない事態になってしまうだろう。

今はまだ、製造業町工場がなんとか踏ん張っている。その人達がいるうちに何らかの手を打たなければ、もう手遅れになってしまうだろう。

そんな製造業町工場の現場に活気を取り戻すには、そこにあるドラマを取り上げることはないかと思った。コマを作るドラマ、戦うドラマ、家で子供達と一緒に遊ぶドラマ…。

コマを回した従業員が新聞やTVで取り上げられたら会社でも家庭でもヒーローになれるだろう。それが明日への活力となり、頑張ろう！という気も産まれる。人はお金以外のモチベーションでも十分良い結果を残せるのだから。

#### 4. コマ大戦協会会長みどりかわはこんな人

コマ大戦の言い出しっぺで、協会会長のみどりかわは10年前にリストラされて今の会社(株式会社ミナロ)を作った。2004年頃、ITバブルと呼ばれていた好景気がはじけて、15年勤めた木型屋を解雇された。「これ以上やっても赤字を重ねるだけだから、来月たたむ」と。

まさか自分の会社が無くなるなんて思ってもいなかった。だけど仕事や売上の減少は肌で感じていたから、ひょっとするとやばいかもなあとには思っていたが、それはあっけないほど簡単にやって来た。

さて来月からどうする？ 無職だ。仕事が無くなり無給である。いろいろと相談してみたが、再就職をすすめる人がほとんどであった。中にはうちにくるんだろ？と当然の顔をして待っていてくれた他の会社経営者の人もいた。

でも、再就職したとしても、また同じようにリストラされる可能性は高い。町工場とは取引先の要求であつという間に消し飛んでしまう、そんな体質なのだ。であれば、自分の思いなりの会社を作ってみよう。万が一失敗したとしても、まだ取り返せる年齢だろうし、幸いリストラされた仲間三人が、しばらくは無給でも良いから一緒にやると言ってくれている。これはチャンスなんじゃないかと。

当時はホームページを使って営業している町工場はまだそう多くはなかったので、ミナロはこれから、ホームページを営業マンとし、www.minaro.comを看板とすると決めた。それが功を奏して、3社だけだった取引先数が、1年後には31社まで増えた。

その後、メールマガジンやブログ、SNSを活用していくのだが、それらは全てミナロが何を考え、何をやっているのかを発信するツールな

のである。

もしも、ミナロがホームページで「安くしますから仕事を下さい！」的なモノの書き方をしていたら、ここまで存続出来たかどうかは自信がない。それは価格競争を産むだけである。

それよりも先に人と人が繋がり、その中から仕事が発生し、それがお金に繋がって行くという流れがあれば、それが関わる人皆に最も幸せな方法だと思っている。10年前に起業したとき、「金は後から必要なだけついてくる」という言葉を聞かされた。会社設立でお金の無い時であったから、そんなことを言われたって明日の飯が大変なんだ！と思ったが、今になって思えば当時は余裕が全く無かったのだろう。判らないなりにその教えを忘れずにいたことが、今でも経営の支えになっている。

しかし、いつになっても中小企業が大変なのは変わらない。少ない資本と人材ではやりたい活動に限界があると、2008年に「心技隊」という団体を作った。「技は心と共にあり」というスローガンのもと、利他の精神で製造業町工場を繋いでいこうという団体である。

## 理念から抜粋

日本経済の存続には産業の維持、発展が欠かせない、しかし発展どころか維持さえもままならない企業が多い。

それは、金銭的だったり跡継ぎの問題だったりする。

経済成長期にがんばってきた町工場のオヤジさん達が口をそろえて言う、自分の子供には継がせたくない。

それって、とても悲しいことではないか。

原材料から付加価値を産み出せる製造業が経済を牽引しないと、国としても存続出来なくなる。確かに今は製造業にとって苦しい時だが、どの業種を選ぼうとも国力が無くなれば行きつく所は同じ。

ならば！ まだ技術を持っているなら、まだ現場を持っているなら、まだ心が残っているのなら、

製造業に興味を示さなくなった若者に、ものづくりの楽しさを知ってもらう機会をつくろう、現場を開放し、近隣の学生や子供を招き入れ、体験学習を実施し、技術者予備軍を作るしかない。

心技隊は「技は心と共にあり」を合い言葉に、製造業に関わる経営者が日本の将来を本気で考え、

心と技を、我が為でなく、他が為に使うことでまわりが豊かになり、いずれ我々にも帰ってくるという考えだ。

目先の利益ばかりを追いかけると、肝心なモノを忘れて行く。

それが今の製造業を取り巻く状況を作った最大の原因ではないのか。

心ある者よ、まだ日本をあきらめられない者達よ、一緒に立ち上がろうではないか。

4社で始めた活動も今では10社に増え、その理念に賛同してくれる人も増えている。この心技隊で始めたのが全日本製造業コマ大戦なのである。現在では、全日本製造業コマ大戦協会に参加する一団体として活動している。

## 5. 大手と政府にまかしてられるか！

日本をリードして来た大手企業はここへ来て、為替、法人税、関税、派遣禁止、温室効果ガス、電力不足等々の問題でいとも簡単に海外へ出て行ってしまふ。我々下請け気質の多い町工場が、一緒に海外に出られるなら良いかもしれない。

しかし、行けたとしても、現地で雇うのは日本人以外の労働者。つまり会社として存続出来たとしても、全く日本人のためにはなっていない。一体誰のために、なんのために経営してい

るのだろうか？

首相が言う言葉は紙面に載る、経団連会長が言う言葉も紙面に載る。しかし、その内容を読んで納得している国民がどれだけいるのか？「消費増税賛成9割も！」という見出しの紙面があった。だけど中小企業経営者が集まる場所で、賛成の人は手を挙げてと言ってもほとんど手を挙げる人はいない、これが真の国民の意見だろう。経団連の言う、消費税アップ&法人税ダウンの要求は、一見国を考え、国民目線かのように見えるが全く違う。

海外に物を輸出する大手企業は、国内で払った消費税は返還されている。その額は1社で2000億円以上にもなる。消費税率が上がったとしても、返還金額も上がるのでフトコロは痛まない、その分法人税が下がれば、会社経営としては良いことだらけだろう。先にあげた国内問題が解消されないのは政府が悪いと決めつけ、この御時世においてもまだ自分たちの利益だけをなりふり構わず要求する姿勢は、すでにモンスターと言っても良いんじゃないだろうか。そして肝心な政府もその原因を取り除く案はないようだ。

ならば、労働者の7割を雇用する中小企業経営者の声も紙面に載せたらどうか。中小企業経営者は百戦錬磨の交渉術で、従業員とその家族を守って来た。政権がどうなるだろうがお構いなしで生き延びて来た。誰にも媚びず、誰のせいにもせず、自分の命をかけて経営している者達だ。

政府、大手、中小企業が書く3つの記事を読み比べて、どれがもっとも国民の考えに近いのか、どれがもっとも大事かを選んでもらえば、大手不在の経済になったとしても、政府は労働者の7割の意見を知り、味方につけることが出来るだろう。ここ最近はやベノミクスで良い雰囲気は出来上がっているが、まだまだ实体经济に落ちてくるのは時間がかかるだろう、しかし我々はあきらめない。そのまだあきらめられな

い人が居るうちに、夢と希望が描ける国づくりをしていかなければ本当に手遅れになってしまう。

国を変えるには国民の総意が必要だ。その為にも政府だけでも大手だけでもなく、中小企業経営者が立ち上がらなければならない。当事者意識の最も強い中小企業経営者だからこそ出来る国づくりなのである。

## 6. コマ大戦の今後

はじめてまだ1年も経っていないにもかかわらず、ここで執筆を依頼されるように、TV、ラジオ、新聞等に取り上げられ、政府がまとめる中小企業白書にも取り上げられた。これだけ注目され期待されている事実を考えれば、今後参加チームは益々増え続けていくだろう。その思いのあるチームの中から、コマをきっかけにした自社商品やサービス、BtoBもBtoCでも市場の創造と拡大が出来ることを期待している。

また、高校や大学からの参加も多く、中には授業の一環でコマ大戦を使いたいという話も頂いているし、地域活性化のために地元でコマ大戦をやりたいという話もある。各地からの要請に応えるコマ大戦運営本部作りは急務である。

そして、2013年2月には、第2回目の日本チャンピオンが決まった。その勝者を連れて海外にコマを持って乗り込むなんて事が出来たら良いなあと考えている。そのためには、さまざまな壁を乗り越えなくてはならないが、中小企業の仲間達が本気で考えれば、意外とすんなり事が進むかもしれない。日本の技術を大手に頼らず海外に伝える。これもコマ大戦の目的の1つである。

## 7. 工業高校に期待すること

教員のみなさまへ

コマ大戦を授業の一環に取り入れ、学内チャンピオン決定戦や、全国コマ大戦甲子園などを開催してはいかがだろうか？

マンネリ化する授業に、コマを作り勝つという明確な目標ができることで、生徒さんはより身が入る授業になるのではないだろうか。



学生のみなさんへ

すでに全国から高校生がコマ大戦に挑んでいる。

東北の白石工業高等学校は地方予選で準優勝までいった。とはいえまだまだ参加数は少ない、今がチャンスである。

工業高校で学んだ技術で日本一を目指してみても？コマ大戦は大人も子どもも関係無く、技を競う大会なのだから。

最後に明治維新の志士たちに強く影響を残した佐久間象山の言葉を書いて終わりとしたい。

十歳までは自分のことだけを考えていればいいが、

その先、十代になったら家族のことを、二十代では故郷のことを考える。

三十代で日本のことを考え、四十代で世界のことを考える。

